

写真家大辻清司のアーカイブ構築

芸術学部
写真・映像メディア学科
教授

大日方 欣一



研究シーズの紹介

本研究は、20世紀日本の写真表現に大きな足跡を残した写真家大辻清司（1923–2001）の生涯の創作活動をめぐり、現存する原資料の精査・アーカイブ化の作業をとおり、その生成と変容の全過程を明らかにすることを目指すものである。

アート・アーカイブの構築に意欲的に取り組む、武蔵野美術大学美術館・図書館との提携にもとづき、同館が収蔵する大辻清司資料のアーカイブ研究を継続。2023年はその中間

報告的な成果発表として、展覧会「生誕100年 大辻清司・眼差しのその先—フォトアーカイブの新たな視座—」を企画実現した。

同展の成果を踏まえ、2024年6月、九州産業大学美術館での「もしも…大辻清司の写真と言葉」展の開催準備をすすめている。



写真アーカイブ

- 20世紀の映像遺産に潜在する、新たな価値を引き出す。



大辻清司作品

《見えぬ意味を見ぬ意味と》

1980

期待される活用シーン

- 映像資料の価値を引き出し、位置づける。
(街おこし、地域文化振興)



映像アーカイブの方法論、価値発見の可能性をともに探求し、知見を共有化できる。



大辻清司アーカイブの研究
成果を多数盛り込んだ
展示例(神奈川県立近代
美術館「実験工房展」)

- 芸術文化研究の深化・促進。
(美術館、博物館等)



アーカイブ形成の先端的事例として、芸術・映像文化研究をリードできる。



その他の研究テーマ

- ・ 1970年代における現代美術への写真・映像メディアの導入／浸透に関する研究。
- ・ 写真表現における「日付」の効果に関する研究—桑原甲子雄、荒木経惟を中心に。